http://www.ne.jp/asahi/chonan/kenkyu/　　email ： ch0330@support.email.ne.jp

全国長南会通信 46号

事務局 ：300-0301 茨城県稲敷郡阿見町青宿 930　長南秀則 TEL/FAX　029-XXX-XXXX

発行日 平成 25 年 12 月 30 日

みんなで演じる母を探す旅

宮城県塩釜市の離島・野々島の子供たちが 10 月 19 日、地元小中学校の文化祭でオリジナル劇「メダカの詩～母さんにあいたくて～」を披露する。10 年目の節目となる今回は、一昨年に続いて東日本大震災をテーマに選んだ。津波で行方不明になった母親を捜すメダカの物語を、29 人しかいない「島の学校」の全児童・生徒が演じる。

野々島児童生徒 29 人

野々島は、日本三景・松島の一部を構成する浦戸諸島の一つ。島には諸島で唯一の小・中学校の浦戸第二小学校と浦戸中学校があり、有人 4 島の子供たちが通っている。浦戸諸島の現在の人口は 443 人で、震災後に約 25%減少した。

オリジナル劇の上演は 2004 年度に始まった。在校生が少なく、卒業後に島外に出た子供が環境の違いに戸惑うこともあったため、「将来、物おじすることのないように」と教師たちが考えた。

内容は毎年変わるが、島に愛着を持ってほしいとの願いを込めて、諸島の歴史や文化の話がいつも盛り込まれる。脚本はセリフだけで書かれ、演者の動きなどを指示する「ト書き」がない。「どう表現したら観客に伝わるのか」を子供たちに考えてもらう狙いがある。

11 年は「エール」と題し、震災で打撃を受けた浦戸の主産業のカキ養殖場を舞台に、主人公の少女と養殖業者の交流を描いた。

2 年ぶりに震災を題材にした今回の主人公は、津波で母親が行方不明になり、弟妹 3 匹と暮らすメダカの「リュウ」。他のメダカたちから色の違いをからかわれる弟妹を見て、美しい色をした母親を捜

す旅に出たリュウが、様々な生き物との出会いの中で「絆」の大切さを学ぶストーリーだ。

主人公をメダカにしたのは、野々島の隣の寒風沢島の子供たちが、震災で激減した島のメダカを復活させる活動に取り組んでいるためという。13 人の中学生を中心に、全員一つになって練習に励んでおり、リュウ役の中学 3 年庄子天音君（15）は「浦戸の自然の美しさが伝わるように一生懸命演技するので、たくさんの人に見に来てほしい」と話している。

劇は 30 日に塩釜市本町の遊ホールでも上演される。

2013/10/17 読売新聞朝刊

浦戸諸島

宮城県塩釜市

野々島は、寒風沢島桟橋の向かい側（約 200m）の島。以前は、寒風沢島に浦戸第一小学校があったが、野々島の浦戸第二小学校に統合された。また、野々島には浦戸中学校がある。

浦戸第二小学校は浦戸諸島唯一の小学校である。

浦戸諸島は、桂島（かつらしま）、野々島（ののしま）、寒風沢島（さぶさわじま）、朴島（ほうじま）の有人島と、馬放島、大森島など多くの無人島からなる。松島浦の戸口にあることから、浦戸と呼ばれた。外松島とも呼ばれている。

浦戸諸島と戊辰戦争

慶応 4 年正月に勃発した戊辰戦争は、京都、江戸から東北、北海道へと舞台が移っていく。榎本武揚率いる榎本艦隊が慶応４年８月、開陽丸ほか幕府艦隊を率い松島湾に入ってきた。江戸から箱館に向かう途中、台風や政府軍の攻撃で負傷した軍艦の修理のためだった。場所は松島湾浦戸諸島の寒風沢島他４島。

当時浦役人を命じられていた寒風沢の長南清

八郎は、南部藩などからも応援を頼んで軍艦の修理をした。清八郎は１６００年代、上総から来た長南和泉守から１１代目にあたる。

１０月に修理が終わるまで、幕府軍は各民家に分泊したが、その中に元新選組の土方歳三もいた。多分土方は、大鳥圭介らとともに宇都宮、日光、会津と転戦し陸軍副長として仙台に入っているので、ここで合流したのだろう。

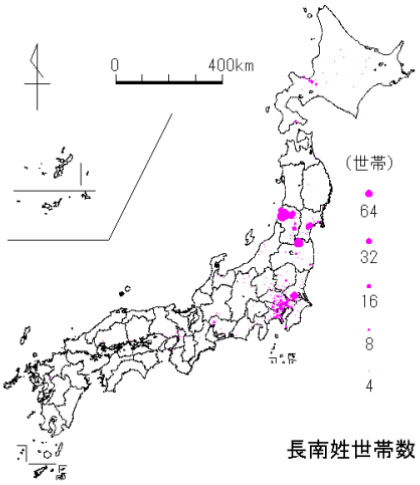
寒風沢島を出航する際、榎本武揚はそれ相当の賃金や謝礼を各戸に支払い、艦に引き上げた。

翌年明治２年３月、榎本幕府軍を追って官軍が入港し、２日間停泊したが、浦戸諸島より物資を徴発し、浦戸諸島には鶏までいなくなり、徹底的な経済の打撃を受けた。その際、記録、文献まで持ち去られ、ある旧家では今でも獅子頭を門戸より入れない程の凝りようであるいう。

長南姓の都道府県別世帯数と分布図

1	北海道	115	25	滋賀	2	37	香川	1
2	青森	4	26	京都	1	38	愛媛	0
3	岩手	4	27	大阪	10	39	高知	0
4	宮城	122	28	兵庫	9	40	福岡	2
5	秋田	2	29	奈良	1	41	佐賀	0
6	山形	386	30	和歌山	2	42	長崎	0
7	福島	93	31	鳥取	1	43	熊本	2
8	茨城	104	32	島根	0	44	大分	0
9	栃木	25	33	岡山	1	45	宮崎	0
10	群馬	10	34	広島	3	46	鹿児島	0
11	埼玉	88	35	山口	0	47	沖縄	0
12	千葉	76	36	徳島	1		合計	1346
13	東京	119						
14	神奈川	115						
15	新潟	7						
16	富山	3						
17	石川	0						
18	福井	0						
19	山梨	2						
20	長野	5						
21	岐阜	3						
22	静岡	6						
23	愛知	18						
24	三重	3						

平成 10 年、電話帳データを集計



我が人生を決定したもの

（その３）中村就一

決戦の最中の沖縄への命令で、浜松を出たが、神戸三ノ宮の空爆のため京都で７日間足止めされた。

やっと命令が出て九州へ向かった。しかし鉄道は、大急ぎで敷設したばかりのため、列車は、人間が歩くほどのスピードだから窓から道をゆく娘さんに話しかけることもでき、「オーイ」と呼ばわり「兵隊さんがんばって！」などと会話ができた。

関門トンネルを抜けて、九州に入ったら命令があって、二日市で下車し待機せよという。夏休みの小学校に入っていたら、近くの丘に陣地を作る命令。

あとで知ったが、その時すでに沖縄は米軍に占領されていた。地元の村長に招待されての宴会で、村長は「九州だけでも米軍と戦う！」と大いに元気だった。

しかしそれは気分だけだったのでないか。しかし軍命だから近くの丘に横穴を掘って、アンテナだけを立てる陣地づくりが当面の任務だった。

トンネル掘りだから現場では２、３人が働くだけの場所と時間が必要なだけだから、８時間労働としてあとの１６時間はやることがない。学校から現場に通う時間を極少にするために、現場近くの民家に兵隊を分宿させた。民家では主人が軍隊行っているから、１６時間で宿舎の家の田畑を手伝う兵隊があり、大いに喜ばれた。行ところが間もなく福岡の司令部から申し入れが来た。「いい若い者がフンドシひとつで田植えをしてるので聞くと兵隊だった。これはどんなものか。」というのである。そこでフンドシに階級章をぶらさげることにした。

何日もたたぬうちに、天皇陛下の放送があるというので、校庭にラジオを置き、われわれは正式軍装で整列した。ラジオが不具合なのか、放送がよくないのか、天皇の声はまるで何だかわからない。終わったら部隊長が「戦局は厳しい。これからも一層心を引き締めて軍務に精励せよとの天皇の放送である。」と述べた。しかしじつは天皇は「戦争に負けた。」と言ったのだったから、なんとなく気分がゆるやかになった。

部隊長以下の将校もすべて去った校舎はガランとして、奥の小使室にちじこまっている当直の先生と小使いさんだけになった。米軍の無線通話を聞くために、

米国から引き揚げてきた女性を近くの寺に合宿させていたが。これも帰宅させ、お寺にお礼を述べた。最後に小生が学校を出たのは午後４時頃だったが、途中にある朝鮮人の宿舎では、賑やかな声が響いていた。強制的に連れてこられたが、日本が敗れて帰国できるとあって宴会だったらしい。

駅に着いたが今日は列車がないというので、駅の壁ぎわの腰掛に横になっていると、間もなく母娘が来て、うちへいらっしゃいというのでついて行った。夕食をいただいてからフトンを敷き、蚊帳を吊ってくれたので横になった。母と娘は縁側で話しをしている。小生は間もなく寝入ってしまったが、後で思うとひと間だけで、そこに蚊帳を吊って小生が寝ているのと、二人はどこでどうして一夜を過ごしたのかあとで考えたらわからなかった。

軍刀一本抱いて、東京経由、高崎で地方鉄道に乗り換え、入野の寺についた。

この寺は、父の妹道子が嫁いだ軍医の実家である。高崎市内の大きな屋敷を父が借りていたが、父はラバウルの郵便局長だし、小生は軍隊にいたので、用心のために母は妹と弟たち二人をつれて、この山寺に身を寄せていたのである。寺の前をカラス川が流れていて小魚がとれるので弟の碩文（ひろふみ）は喜んでいた。

小生は逓信省の学校、逓信官吏練習所の卒業生で、東京の蒲田郵便局に配属されて籍があったため、就職の苦労はなかった。８月敗戦後９月には蒲田局に勤務していた。

郵便課に配属されて、局内をあいさつ回りした時に、斎藤房江は中学生として、局の手伝いに派遣されていたので、もちろんあいさつした。その時、彼女は天の声を聞いたという。「ホラこの人がお前の夫になる。」

そんなことは知らぬ小生は、ひとりのおとなしい中学生としか認識がなかった。

つづく

中村就一著「長南氏の研究」在庫あり

資料編含めて 1899 頁
注文は著者に直接連絡してください。
277-0027 柏市あかね町 9-10
中村就一
TEL/FAX 04-7166-8216

収 支 報 告

平成 25 年 8 月 1 日～11 月 30 日

繰越金額	537,573		
会費入金	18,000	通信 45 号発行費	12,890
		事務用品費	802
		郵便振替手数料	440
収入合計	555,573	支出合計	14,132
		残　　高	541,441

内　　訳

現　　金	67,474
普通預金	458,237
当座預金	15,730
合　　計	541,441

会費納入ありがとうございました。

長南みさ子	宮城県	2,000
長南愼一	宮城県	2,000
長南成	山形県	10,000
長南厚	山形県	2,000
田村かなさん	千葉県	2,000
合　　計		18,000

編集後記　　本年もお世話になりました。

今年も残り少なくなりました。今年１年間、会員の皆様には色々とご協力、ご支援賜り、まことにありがとうございました。長南会通信の編集、発行を中村就一さんから引き継いで１年が経とうとしていますが、改めて中村さんの行動力の大きさを感じております。「長南氏のルーツを語る会」を北海道から京都までの広範囲で開催し、数えること４４回。

寒風沢島や長南町に各地から長南氏を集めての催し、長南和泉守の栽松賞状の発掘、寒風沢島共同墓地の和泉守の墓の改修、松島瑞巌寺に石碑の建立、鶴岡市での長南年恵の勉強会等、数えてみると、かなりの実績があります。

慶応４年５月、大村益次郎率いる新政府軍と上野彰義隊の戦いがあり、あっけなく彰義隊が敗れるわけだが、その彰義隊の一員であった「長南平七」が東京の斎藤氏に助けられ、後にその子孫が中村就一氏と結婚し、長南氏の先祖調べが始まり、「全国長南会」が結成された。

そんなドラマチックな歴史を持つ長南会です。今後ともよろしくお願いします。

事務局　青宿　長南秀則

新会員「田村かなさん」の自己紹介

　初めまして。田村かなさんと申します。寒風沢・定吉系、伊豆喜三郎の曾孫です。本年４月「城」を検索しておりましたところ「長南城」を見つけました。さらに検索、「全国長南会」、「長南氏の研究」を知りました。　そして祖父伊豆信男から、「先祖は長南和泉守という人」と聞いたことを想い出しました。翌５月５日、母きを子（旧姓。伊豆）と２人で長福寿寺、笠森観音等バスで廻りました。

　長福寿寺で「長南殿」木札を見、四重の塔に手を合わせました。この日暑かったのですが、笠森の坂を下る時、涼やかな千の風に見舞われて、「ご先祖に歓迎されているみたい。」とハシャギました。

　さて、曾祖父伊豆喜三郎の母たつは「長南氏の研究」の中村就一さんの前の奥様（斉藤）房枝さんの御先祖斉藤平七さんの妹でした。

伊豆喜三郎ですが、２０才頃海軍で戦艦三笠のロンドンからの曳航に加わり、退官後、汽缶士屋として東北大学、東京でサッポロビール、トッパン印刷での仕事

をしました。豪快な人だったそうです。その後、次男伊豆信男は水泳のオリンピック候補でしたが、体をこわし断念、後、松島で数カ月療養しました。寒風沢の親戚のボートを借り、島めぐりを楽しんだとの事。回復し電機学校を退学、ダンボール業を営み、大相撲の優勝杯を入れる箱を納めたのが自慢でした。

　ところが昭和１６年第２次大戦になります。材料をヤミで仕入れることが嫌で廃業、三菱銀行に小使いさんとして入行しましたが、すぐに徴兵され満州へ。以降足掛け１３年炭鉱労働（ジャムス）等に従事、昭和２８年興安丸で帰国。

　祖父は小使いさんという職種を気にしていましたが、殆ど業務につかないまま、出征後１３年間三菱銀行から給料が支払われていました。帰国直後、国から遺家族に支給されていた手当を、全額返還して、毎日新聞に″美談″とされ写真入で掲載されました。

いわゆる中共帰りでしたが、そのまま復職でき、少し出世して、得意先回りをしていました。とても潔癖、厳格な人で退職後は妻（祖母）の介護をして、９６才で天国へ。

閑話休題

長南氏の歴史については、長南地方がルーツで、長南和泉守が先祖。戦に敗れて松島へ。

また元は長南姓だったが、伊豆沖で船乗りたちの喧嘩を収めて、伊達の殿様から「今後は伊豆という名前にせよ」とゆうことで、こうなった。くらいしか知りませんでした。

が、水よりも濃いものに導かれ、２年前の震災の年の８月に居てもたってもいられない想いで、岩手から宮城、福島に電車バスの突貫旅行を、母と２人で。

生花が手に入らず造花で、各所お参り

してきました。

寒風沢を船上で確認しました。

鎮魂の旅をすることができて、感謝！

さて、私どもの現況ですが、

祖父の兄伊豆武男の系は１名が生存。

祖父の長男伊豆真理（マコト）の系は息子２人で長男は独身、アメリカ留学中。

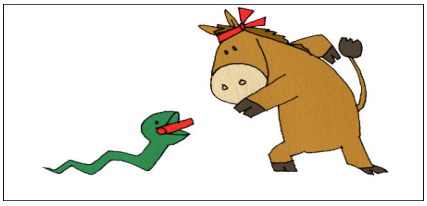
次男はサラリーマンで子供３人。

系としては淋しい限りだと思います。

長南会を知り、大きい家族を意識しております。

青宿の皆様のご苦労を偲びつつ。

巳から午へバトンタッチ



よいお年をお迎えくださ